

下仁田町の野生動物事情と猟友会活動

Wild animals situation and Hunting group activity in Shimonita Town

岩 井 実*

Minoru Iwai

キーワード：鳥獣被害、猟友会、シカ、イノシシ

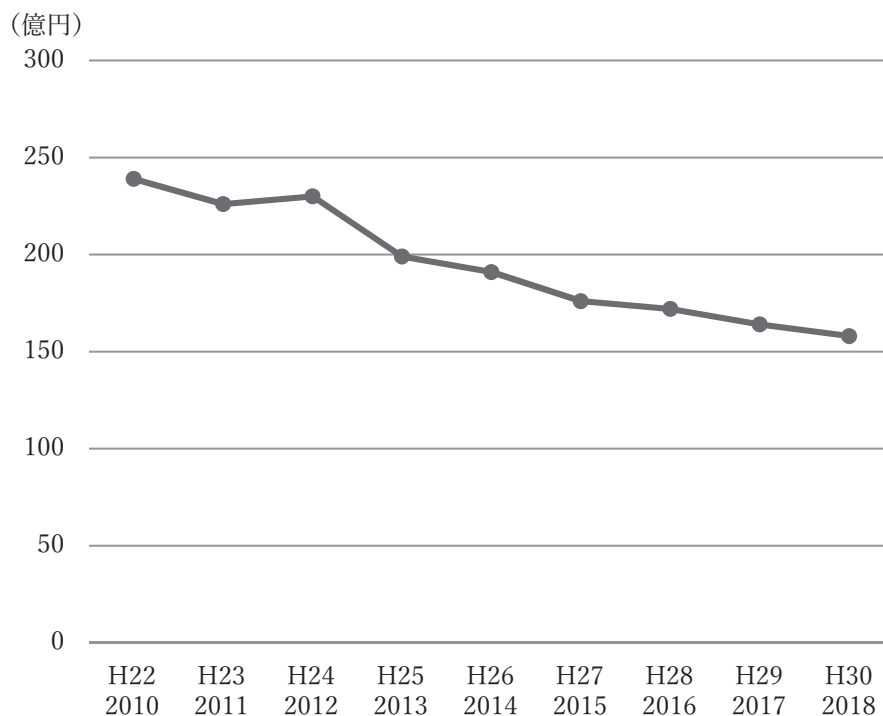
Key words : bird and animal damage, Hunting group, deer, wild boar

はじめに

野生動物による農作物や生活環境被害は2010（平成22）年度をピークに年間約150億円以上の被害額と、全国的に高水準が続いている（第1図参照）。下仁田町も同様に、農作物の被害が多く出ており、農家等による柵の設置などの防除や私たち猟友会によ

る捕獲による対策を行っている。

そんな中、下仁田町の動物事情や猟友会が行ってきた活動について、今回執筆させていただく機会を頂いた。私たちは専門的に動物について研究をしている訳ではないので、現場に携わる者の感じたこととしてとらえていただければ幸いである。



第1図 全国の農業被害の推移
農林水産省 HP の「全国の野生鳥獣による農作物被害状況」を参考に作成

2021年2月2日受付. 2021年2月12日受理.

* 下仁田町猟友会

下仁田町に生息している動物

今回は、特に農作物への被害と影響が大きい、大・中型獣についてスポットを当てていきたいと思う。

下仁田町にはツキノワグマ（口絵2-②）、ニホン

ジカ（第2図 a）、イノシシ（第2図 b）、ニホンカモシカ（第2図 c）、ニホンザル（第2図 d）の5種類の大・中型獣が生息している。特に、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザルは下仁田町はもとより、全国的にも農作物被害額のトップ3と言われるほどの農作物被害を出している。ツキノワグマやニホンカモシ



a. ニホンジカ：体長 90－190 cm程度
体重 50－150 kg程度

特徴：オスには毎年生え変わる角があるがメスには無い。草食性

（撮影場所：下仁田町南野牧，写真提供：下仁田町農林課）



b. イノシシ：体長 50－100 cm程度
体重 50－100 kg程度

特徴：オスは犬歯が発達している。メスは子供と行動することが多い。雑食性

（撮影場所：下仁田町馬山，写真提供：下仁田町農林課）



c. ニホンカモシカ：体長 70－100 cm程度
体重 50－80 kg程度

特徴：オス、メスともに角がある。岩場に生息する。国の特別天然記念物。雑食性と思われる

（撮影場所：下仁田町青倉，写真提供：保科 裕）



d. ニホンザル：体長 30－60 cm
体重 10－30 kg程度

特徴：母系でグループ形成する。オスは成熟期になると群れから離れ単独もしくはオス数頭の群れで行動する。雑食性

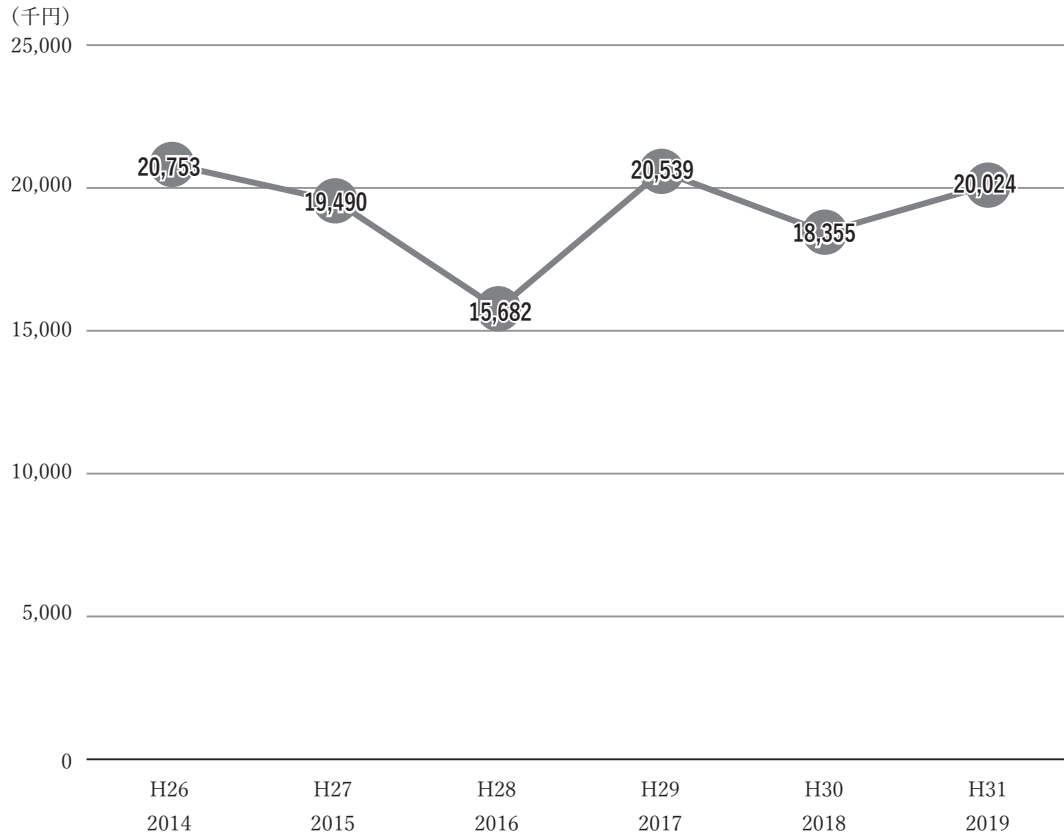
（撮影場所：下仁田町中小坂，写真提供：下仁田町農林課）

第2図 下仁田町の野生動物

力は、昔から下仁田町に生息していたといわれているが、ニホンジカやイノシシなどは1975（昭和50）年頃から、生息が確認されてきたといわれ、ニホンザルに至っては1985（昭和60）年頃から生息や被害が出始めてきたといわれている。

下仁田町の被害状況と対策

下仁田町の農作物被害（第4図）は第3図のとおり横ばいの状態である。しかし、目に見えない被害として、鳥獣被害をうけたため、営農意欲の減退、電



第3図 下仁田町の農業被害額



イノシシによる被害



サルによる被害

第4図 野生動物による被害（写真提供：下仁田町農林課）

気柵等の対策費用の高額負担，農業をすること自体に限界を感じ，農業をやめてしまう方もいる．そのことが原因で耕作放棄地が増加し，鳥獣の生息域が拡大し，新たな被害を誘発するなどの負の連鎖による悪循環の発生も起こっている．被害額や被害面積では測れない農業崩壊も起きていると思われる．

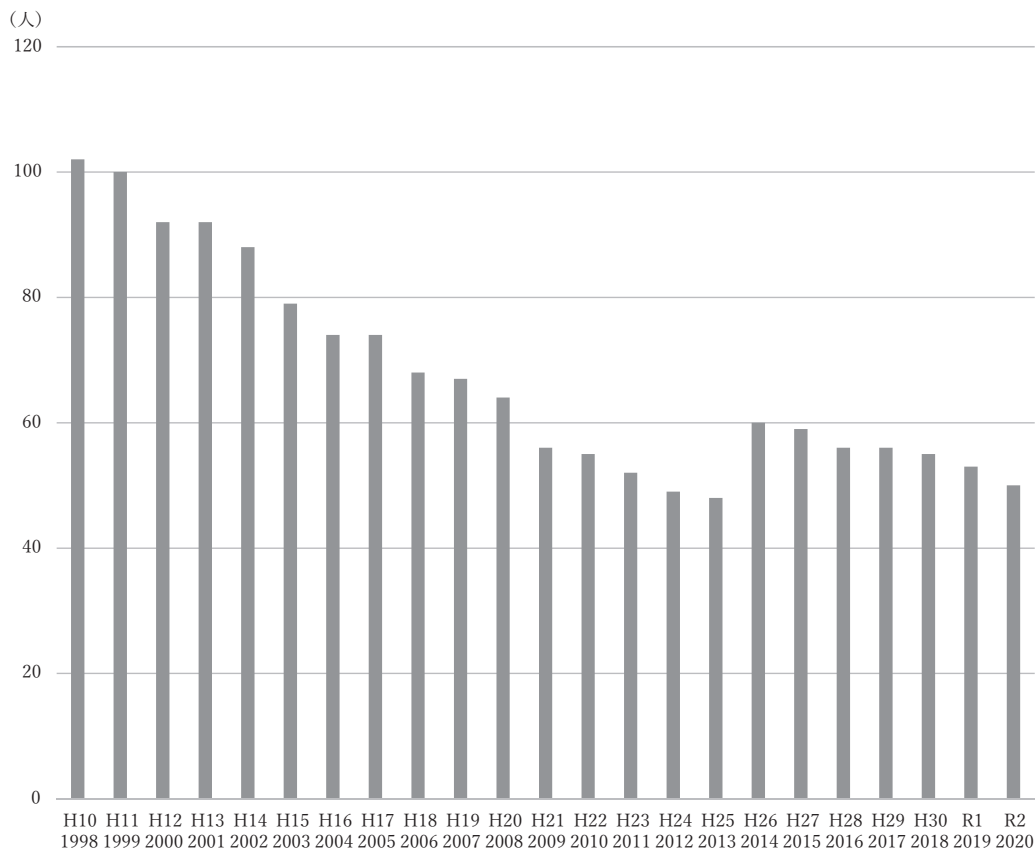
町では2008（平成20）年度に下仁田町鳥獣被害対策協議会を設立し，下仁田町被害防止計画の策定と，被害防止実施隊の任命を県内でいち早く行っており，猟友会より選抜された隊員を非常勤公務員として任命し，捕獲活動の強化を行うなどの被害防止の一役を担っている．また，集落やまとまった農地に，大規模なフェンスや電気柵の設置などの補助事業を実施することにより被害の減少を行っている．こうした作業を行うことで，動物と人間の生活圏を分け被害の低減が図れると思う．

猟友会の変遷と活動

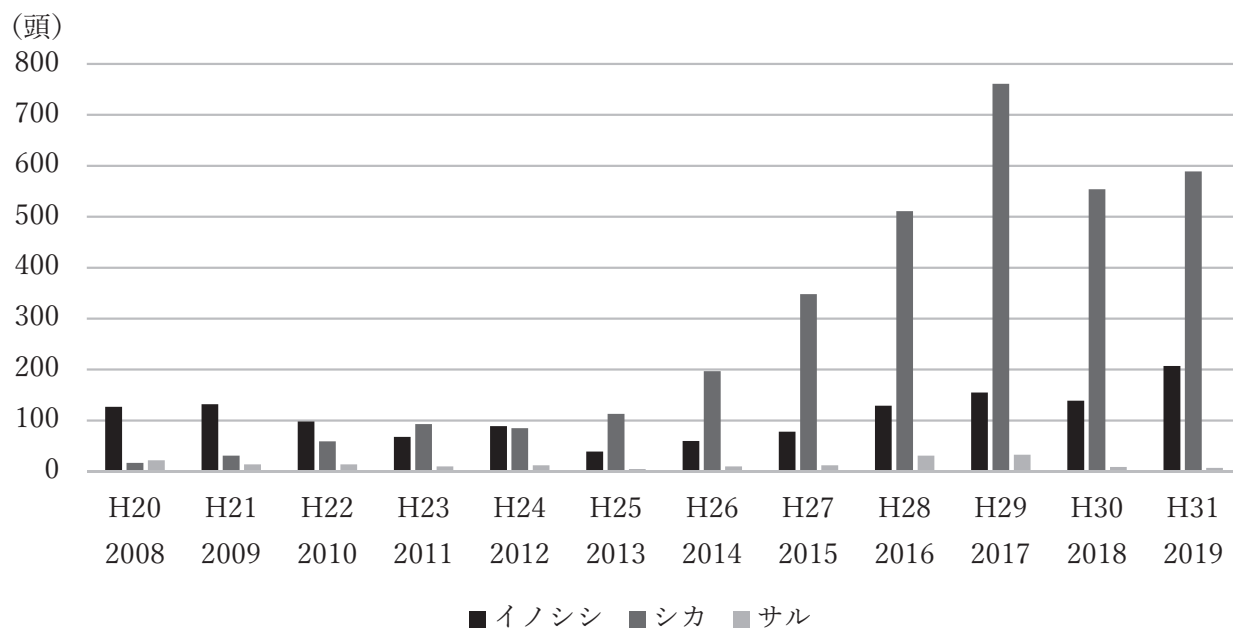
下仁田町猟友会は狩猟を行う者たちの交流や狩猟者登録等の手続をまとめて行うために設立された．1998(平成10)年には約100名程度の会員がいたが，2020（令和2）年には50名程度と，半数以上減少している（第5図）．

これは，高齢化による減少と，動物の命を奪うという異種独特の世界に対する不安などから，新たに狩猟を始めようとする方が少ないためかと思う．こうした状況を受け猟友会では，下仁田町で狩猟を行う他地域の狩猟者で，地域の猟友会に所属していない方を新たに会員として受入れ会員の減少を防ぐ対策を行っている．

猟友会の活動は，捕獲活動が中心になってくと思う．設立当初は現在のようにイノシシやシカ，サルなどの被害は少なく，駆除という，野兎駆除といって野ウサギを中心とした駆除を行っていた．



第5図 猟友会人数



第6図 捕獲数

1998（平成10）年ごろには、小坂地区を中心にサルによる被害が増加し始め、檻による捕獲や銃器による駆除などを行っていたが、2003（平成15）年頃に町農林課、日本獣医生命科学大学・県と協力した檻による捕獲とニホンザルの生態や群れの状況が把握され、被害がゼロになることは出来ないが、適正な捕獲管理により、低減が図ることができた。イノシシやニホンジカに対する捕獲についても、猟友会で研究を重ね、効果的なくくり罠の設置や檻等を使用して捕獲を行っており、捕獲数は県内でもトップクラスである。

第6図を見るとわかるように、捕獲数は年々増加傾向である。そして、2012（平成24）年ごろまではイノシシの捕獲がニホンジカを上回っていたが、現在ではニホンジカの捕獲数はイノシシの約3倍近く増加している。なぜ、ニホンジカがこれほど増えたのか、科学的なことはわからないが、数年前までは狩猟によるニホンジカの捕獲はオスのみの限定であったことが要因ではないかと思われる。現在ではオス・メスともに捕獲ができ、第6図のように有害捕獲数も増加している。2020（令和2）年度（12月現在）はニホンジカ・イノシシの捕獲数が1,000頭を超えており、なかなか生息数を減少させるまでに

は至っていない。猟友会員の減少等により現状維持も難しくなるのではと危惧している。

動物との共生と農地を守るには

今後の課題としては、捕獲のみに頼った対策を進めるのではなく、農業者・地域住民・行政・研究機関等が連携し、防除と捕獲を併せた対策が必要と感じる。よく地域から捕獲を依頼されるが、猟友会が捕獲を行っても、被害がすべてなくなるのではない。電気柵やフェンス等の防除がされていない農地に出る鳥獣を捕獲するのはとても困難である。防除がされていない農地は、鳥獣にとって安全なレストランと同じである。そこに、檻など見慣れない物体が置かれ、いくら中に餌を置いても見向きもされない。くくり罠をかけるにしても同じで、いろいろなところから侵入できる農地の周りに設置しても鳥獣は少しの変化を感じとり違う場所から侵入し効果は上がらない。農地や人間の生活圏と動物の生活圏を分ける事が被害の低減を図る近道になる。

また、農業者の高齢化に比例するように狩猟者も高齢化し、また減少している。下仁田町の猟友会の平均年齢は60代後半である。若い猟友会員も若干な

がらいるが、自分の仕事を抱えている中で、罠の設置や見回りなど、自分の時間を削って行っている。こうしたことが狩猟者の減少に拍車をかけていると思われる。設置や捕獲後の処理は猟友会が行うことはもちろんであるが、設置後の日々の見回りなどは地域でできるようになると、さらなる対策ができるのではないかと感じられる。今後も猟友会としては、地域貢献の一環として駆除活動を地域の皆さんと協力しながらやっていきたい。

謝 辞

本稿を執筆にあたり、資料提供にご尽力いただいた下仁田町農林課の皆様や猟友会員の皆様に感謝申し上げます。

文 献

農林水産省, 農作物被害状況 HP, https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai_zyoukyou/index.html

(要 旨)

岩井 実 (2021) 下仁田町の野生動物事情と猟友会活動. 下仁田町自然史館研究報告, 6, 11-16.

下仁田町には、イノシシ、ニホンジカ、ニホンザル、ツキノワグマ、カモシカの5種類の大型哺乳類が生息している。特に、イノシシ、ニホンジカ、ニホンザルによる農作物被害は下仁田町だけではなく全国的な問題として取り上げられている。被害防止の一環である捕獲を担う下仁田町猟友会の変遷と現状を下仁田町猟友会員や下仁田町の協力を得て本稿で紹介する。